

# 香取遺産

Vol.128

ユネスコ無形文化遺産

「日本の山・鉦・屋台行事」

園生涯学習課

☎(50)1224



▲「日本の山・鉦・屋台行事」の一つ「佐原の山車行事」

なぜ、「山・鉦・屋台行事」  
なのでしょか？

お祭りで曳かれる造形物を「山車」と呼び、何の疑問も持たずに使用しています。しかし、この「山車」の歴史を見てみると、意外なことがわかります。まずは、「山」「鉦」「屋台」について整理していきましょう。

京都の祇園祭の山鉦は、中世に行われていた風流拍子物と呼ばれる行事を直接の母体になっているといわれています。風流拍子物では、目印となる先端に飾りの付いた笠鉦と笛や太鼓の囃子という構成で行われていました。やがて、この笠鉦の先端の飾り（目印）が横に展開したものが「山」、縦に展開したものが「鉦」になり、囃子の部分を主体として展開したものが「屋台」となって造形的な発展を遂げました。

肝心の「だし」とは何かというと、鉦の先端にある依り代としての目印のことを呼びます。つまり、「だし」とは鉦の部分

名称だったのです。

近年、この分野の研究が進み、祭りに出される造形物は、囃される「山」「鉦」と、囃す「屋台」の三つに分類されました。また、一般的に使われている「山車」の語は、実は明治中期以降に定着した造語だったことも分かっています。江戸の天下祭りで行われていた「出し」に「山車」の字をあてたことから、関東圏を中心に祭りで曳かれる造形物を「山車」と呼ぶようになったそうです。しかも、明治時代に出版された国語辞書に「山車」（だし）は「だんじり」の東京方言とされていました。

全国各地の祭礼に出される造形物は、「だし」の発展形だけではなく、その地域が何に楽しみを求め、何を趣向の主体としたかにより、「山」「鉦」「屋台」の中から、さまざまな形の造形物を造り出したのです。したがって、全国的な名称は、それぞれの本質をもって「山・鉦・屋台行事」とされたのです。